

1

問題のページへ

(1)  $f(0) = 1$  より,  $f(x) = ax^2 + bx + 1$  とおくと, $f(-1) = 0$  から,  $a - b + 1 = 0 \dots\dots\dots$  $f(n) = n$  から,  $an^2 + bn + 1 = n \dots\dots\dots$ より  $b = a + 1$ , に代入して  $an^2 + (a + 1)n + 1 = n$ ,  $a(n^2 + n) = -1$ 

$$a = -\frac{1}{n^2 + n}, \quad b = -\frac{1}{n^2 + n} + 1 = \frac{n^2 + n - 1}{n^2 + n}$$

よって,  $f(x) = -\frac{1}{n^2 + n}x^2 + \frac{n^2 + n - 1}{n^2 + n}x + 1$ (2) (1)より,  $f(k) = -\frac{1}{n^2 + n}k^2 + \frac{n^2 + n - 1}{n^2 + n}k + 1$  なので,

$$\begin{aligned} S &= \sum_{k=0}^n f(k) = -\frac{1}{n^2 + n} \cdot \frac{1}{6}n(n+1)(2n+1) + \frac{n^2 + n - 1}{n^2 + n} \cdot \frac{1}{2}n(n+1) + n + 1 \\ &= -\frac{1}{6}(2n+1) + \frac{1}{2}(n^2 + n - 1) + n + 1 = \frac{1}{6}(n+2)(3n+1) \end{aligned}$$

(3)  $(n+2)(3n+1) = (n+2)(2n+n+1) = 2n(n+2) + (n+1)(n+2)$  と変形すると,  $2n(n+2)$  は偶数, さらに  $n+1$ ,  $n+2$  のいずれかは偶数なので,  $(n+1)(n+2)$  も偶数となり,  $(n+2)(3n+1)$  は偶数となる。また,  $(n+2)(3n+1)$  が 3 の倍数となる条件は,  $3n+1$  が 3 の倍数でないので,  $n+2$  が 3 の倍数となることである。よって,  $S$  の値が整数であるためには,  $(n+2)(3n+1)$  が 6 の倍数, すなわち  $n+2$  が 3 の倍数であることが必要十分である。

## [ 解 説 ]

(2)の結果から, (3)では  $(n+2)(3n+1)$  が偶数になることをいえば, 題意の証明ができます。  $n$  を偶奇で分けてもよいのですが, 上の解では式変形をしてみました。

2

問題のページへ

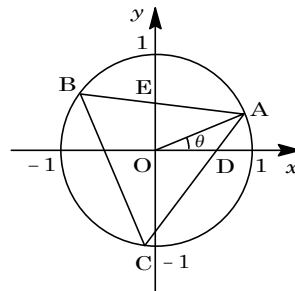
正三角形 ABC に対して  $A(\cos\theta, \sin\theta)$  とおくと、対称性から  $0 < \theta < \frac{2}{3}\pi$  の場合だけを考えても一般性を失わない。

(i)  $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$  のとき

OAD において、 $\angle ADO = \pi - \left(\theta + \frac{\pi}{6}\right) = \frac{5}{6}\pi - \theta$

$$\frac{OD}{\sin \frac{\pi}{6}} = \frac{1}{\sin\left(\frac{5}{6}\pi - \theta\right)}$$

$$OD = \frac{\sin \frac{\pi}{6}}{\sin\left(\frac{5}{6}\pi - \theta\right)} = \frac{1}{\sqrt{3} \sin \theta + \cos \theta}$$



OAE において、 $\angle OEA = \pi - \left(\frac{\pi}{6} + \frac{\pi}{2} - \theta\right) = \frac{1}{3}\pi + \theta$  より、

$$\frac{OE}{\sin \frac{\pi}{6}} = \frac{1}{\sin\left(\frac{1}{3}\pi + \theta\right)}, \quad OE = \frac{\sin \frac{\pi}{6}}{\sin\left(\frac{1}{3}\pi + \theta\right)} = \frac{1}{\sin \theta + \sqrt{3} \cos \theta}$$

ABC の第 1 象限にある部分の面積を  $S$  とすると、

$$\begin{aligned} S &= \frac{1}{2} OD \sin \theta + \frac{1}{2} OE \cos \theta = \frac{1}{2} \cdot \frac{\sin \theta}{\sqrt{3} \sin \theta + \cos \theta} + \frac{1}{2} \cdot \frac{\cos \theta}{\sin \theta + \sqrt{3} \cos \theta} \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{\sin^2 \theta + 2\sqrt{3} \sin \theta \cos \theta + \cos^2 \theta}{\sqrt{3} \sin^2 \theta + 4 \sin \theta \cos \theta + \sqrt{3} \cos^2 \theta} = \frac{1}{2} \cdot \frac{\sqrt{3} \sin 2\theta + 1}{2 \sin 2\theta + \sqrt{3}} \\ &= \frac{\sqrt{3}}{4} - \frac{1}{4(2 \sin 2\theta + \sqrt{3})} \end{aligned}$$

$0 < \theta < \frac{\pi}{2}$  なので、 $0 < \sin 2\theta < 1$  となる。

よって、 $\sin 2\theta = 1$  のとき最大値  $S = \frac{\sqrt{3}+1}{2(2+\sqrt{3})} = \frac{\sqrt{3}-1}{2}$ 、 $\sin 2\theta = 0$  のとき最小値

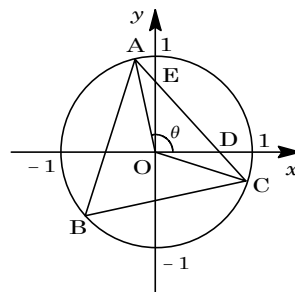
$$S = \frac{1}{2\sqrt{3}} = \frac{\sqrt{3}}{6} \text{ をとる。}$$

(ii)  $\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{2}{3}\pi$  のとき

OCD において、 $\angle ODC = \pi - \frac{\pi}{6} - \left(\frac{2}{3}\pi - \theta\right) = \frac{\pi}{6} + \theta$

$$\frac{OD}{\sin \frac{\pi}{6}} = \frac{1}{\sin\left(\frac{\pi}{6} + \theta\right)}$$

$$OD = \frac{\sin \frac{\pi}{6}}{\sin\left(\frac{\pi}{6} + \theta\right)} = \frac{1}{\sqrt{3} \sin \theta + \cos \theta}$$



OAE において,  $\angle OEA = \pi - \frac{\pi}{6} - (\theta - \frac{\pi}{2}) = \frac{4}{3}\pi - \theta$  より,

$$\frac{OE}{\sin \frac{\pi}{6}} = \frac{1}{\sin(\frac{4}{3}\pi - \theta)}, \quad OE = \frac{\sin \frac{\pi}{6}}{\sin(\frac{4}{3}\pi - \theta)} = \frac{1}{\sin \theta - \sqrt{3} \cos \theta}$$

ABC の第 1 象限にある部分の面積を  $S$  とすると,

$$\begin{aligned} S &= \frac{1}{2} OD \cdot OE = \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{\sqrt{3} \sin \theta + \cos \theta} \cdot \frac{1}{\sin \theta - \sqrt{3} \cos \theta} \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{\sqrt{3}(\sin^2 \theta - \cos^2 \theta) - 4 \sin \theta \cos \theta} = -\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{\sin 2\theta + \sqrt{3} \cos 2\theta} \\ &= -\frac{1}{4 \sin(2\theta + \frac{\pi}{3})} \end{aligned}$$

$\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{2}{3}\pi$  より  $\frac{4}{3}\pi < 2\theta + \frac{\pi}{3} < \frac{5}{3}\pi$  なので,  $-1 < \sin(2\theta + \frac{\pi}{3}) < -\frac{\sqrt{3}}{2}$  となる。

よって,  $\sin(2\theta + \frac{\pi}{3}) = -\frac{\sqrt{3}}{2}$  のとき最大値  $S = \frac{1}{2\sqrt{3}} = \frac{\sqrt{3}}{6}$ ,  $\sin(2\theta + \frac{\pi}{3}) = -1$  のとき最小値  $S = \frac{1}{4}$  をとる。

(i)(ii)より,  $S$  は最大値  $\frac{\sqrt{3}-1}{2}$ , 最小値  $\frac{1}{4}$  をとる。

### [ 解 説 ]

よくありそうな問題です。内容的には正弦定理の応用ですが, 意外に奥が深いという感じがします。

3

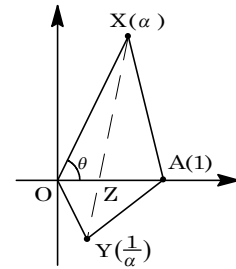
問題のページへ

$$(1) \arg \alpha = \theta \text{ より, } \arg \frac{1}{\alpha} = \arg 1 - \arg \alpha = -\theta$$

$$\text{よって, } \angle YOX = \theta - (-\theta) = 2\theta$$

$$\begin{aligned} \angle XAY &= \arg \frac{\frac{1}{\alpha} - 1}{\alpha - 1} = \arg \frac{1 - \alpha}{\alpha(\alpha - 1)} = \arg \left( -\frac{1}{\alpha} \right) \\ &= \arg(-1) - \arg \alpha = \pi - \theta \end{aligned}$$

$$\text{以上より, } \angle XAY = \pi - \frac{1}{2} \angle YOX, \quad \angle A = \pi - \frac{1}{2} \angle O$$



(2)  $t < 0$  のとき  $T(t)$  は明らかに  $OXY$  の外部にあるので、以下、 $t \geq 0$  の場合を考える。

まず、線分  $XY$  と実軸との交点を  $Z(z)$  とすると、(1)より、実軸は  $\angle XOY$  の二等分線なので、

$$XZ : ZY = OX : OY = |\alpha| : \left| \frac{1}{\alpha} \right| = |\alpha|^2 : 1$$

$$\text{よって, } z = \frac{\alpha + |\alpha|^2 \cdot \frac{1}{\alpha}}{|\alpha|^2 + 1} = \frac{\alpha + \alpha \bar{\alpha} \cdot \frac{1}{\alpha}}{|\alpha|^2 + 1} = \frac{\alpha + \bar{\alpha}}{|\alpha|^2 + 1}$$

ここで、 $\alpha = r(\cos \theta + i \sin \theta)$  とおくと、 $z = \frac{2r \cos \theta}{r^2 + 1}$  となる。

さて  $0^\circ < \theta < 90^\circ$  より、 $0 < z < \frac{2r}{r^2 + 1} = \frac{2}{r + \frac{1}{r}}$  であり、さらに  $r > 0$  から  $r + \frac{1}{r} \geq 2$

(等号は  $r = 1$  のとき) なので、 $0 < z < 1$  である。

以上より、 $T(t)$  が  $OXY$  の外部にある条件は、 $t < 0$  または  $t \geq 1$  である。

### [ 解 説 ]

(2)の問題文「 $\alpha$  によらず」という部分は、内容が曖昧です。ここでは、複素数平面の第1象限において、任意の位置に  $\alpha$  があると解釈しました。

4

問題のページへ

(1)  $f(t) = e^t$  のとき,  $g(x) = \int_0^1 |e^t - x| dt$  となる。

(i)  $x < 1$  のとき  $g(x) = \int_0^1 (e^t - x) dt = [e^t - xt]_0^1 = -x + e - 1$

このとき, 関数  $g(x)$  は単調減少となる。

(ii)  $1 < x < e$  のとき

$$g(x) = \int_0^{\log x} -(e^t - x) dt + \int_{\log x}^1 (e^t - x) dt = -[e^t - xt]_0^{\log x} + [e^t - xt]_{\log x}^1$$

$$= -(x-1) + x \log x + (e-x) - x(1 - \log x) = 2x \log x - 3x + e + 1$$

$$g'(x) = 2 \log x + 2x \cdot \frac{1}{x} - 3 = 2 \log x - 1 \text{ とな}$$

り, 関数  $g(x)$  の増減は右表のようになる。

極小値は,  $g(\sqrt{e}) = e - 2\sqrt{e} + 1 = (\sqrt{e} - 1)^2$

である。

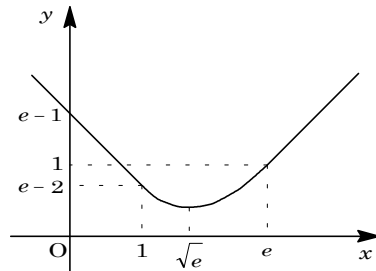
$x$	1	...	$\sqrt{e}$	...	$e$
$g'(x)$		-	0	+	
$g(x)$	$e-2$	$\searrow$		$\nearrow$	1

(iii)  $x > e$  のとき

$$g(x) = \int_0^1 -(e^t - x) dt = x - e + 1$$

このとき, 関数  $g(x)$  は単調増加となる。

(i)(ii)(iii)より,  $y = g(x)$  のグラフの概形は右図のようになる。



(2) 条件より  $a = f\left(\frac{1}{2}\right)$ , また  $b = f(0)$ ,  $c = f(1)$

とおく。すると,  $f(t)$  は単調増加関数なので,  $b < a < c$  となる。

さらに,  $F'(t) = f(t)$  とおくと,

(i)  $x < b$  のとき  $g(x) = \int_0^1 \{f(t) - x\} dt = [F(t) - xt]_0^1 = F(1) - F(0) - x$

このとき, 関数  $g(x)$  は単調減少となる。

(ii)  $b < x < c$  のとき

$f(u) = x$ , すなわち  $u = f^{-1}(x)$  とおくと,

$$g(x) = \int_0^u -\{f(t) - x\} dt + \int_u^1 \{f(t) - x\} dt = -[F(t) - xt]_0^u + [F(t) - xt]_u^1$$

$$= -2F(u) + 2xu - x + F(0) + F(1)$$

$$g'(x) = -2F'(u) \frac{du}{dx} + 2u + 2x \frac{du}{dx} - 1 = -2f(u) \frac{du}{dx} + 2x \frac{du}{dx} + 2u - 1$$

$$= -2f(f^{-1}(x)) \frac{du}{dx} + 2x \frac{du}{dx} + 2u - 1 = -2x \frac{du}{dx} + 2x \frac{du}{dx} + 2u - 1$$

$$= 2u - 1 = 2f^{-1}(x) - 1$$

条件より  $a = f\left(\frac{1}{2}\right)$  なので,  $f^{-1}(a) = \frac{1}{2}$  である。

さて,  $f(t)$  が単調増加関数なので,  $f^{-1}(x)$  も単調増加関数となり,  $g'(x) = 0$  すなわち  $f^{-1}(x) = \frac{1}{2}$  の解は  $x = a$  となる。

さらに  $g'(x)$  の符号は,  $x = a$  の前後で負から正に変わる。

$x$	$b$	...	$a$	...	$c$
$g'(x)$		-	0	+	
$g(x)$		↘		↗	

すると, 関数  $g(x)$  の増減は右表のようになる。

$$(iii) \ x > c \text{ のとき } g(x) = \int_0^1 -\{f(t) - x\} dt = -F(1) + F(0) + x$$

このとき, 関数  $g(x)$  は単調増加となる。

(i)(ii)(iii)より,  $g(x)$  はすべての  $x$  に対して連続なので,  $x = a$  で最小値をとる。

### [ 解 説 ]

(2)は(1)を一般化したもので, 同じように論理を展開することができます。しかし, 逆関数の扱い方など, かなり難易度はアップします。